

早期胃癌アトラス

細井 董三, 馬場 保昌, 杉野 吉則 著

消化管画像診断学の歴史そのものとも言える一冊

市立旭川病院消化器病センター長/内科(消化器)診療部長

斉 藤 裕 輔

現在, 消化器内科医にとって, 早期胃癌における治療の興味はESD, 診断の興味は内視鏡, とりわけ拡大内視鏡, NBIであり, X線造影検査に興味を示す若い医師はごく少数の時代である。確かに近年の内視鏡診断・治療機器の進歩は著しいものがあり, X線造影検査機器の進歩に比較して飛躍的といっても過言ではない。しかしながら, 早期胃癌診断におけるX線造影検査は既に不要となってしまったのであろうか? この「早期胃癌アトラス」を熟読した後には上述した不要論を唱える者は皆無となるであろう。

消化管造影検査の中で胃は最も一般的に行われているが, 実際, 本当の意味での精密検査となると, 大腸や小腸と比較して胃は圧倒的に難しい。被患者の体格や胃の形, 病変の存在部位などに撮影技術が勝てず, 満足な病変の描出に失敗した経験が小生にも山ほどある。本アトラスにはこれまでの日本の早期胃癌の最も美しいX線像が選りすぐって掲載されており, ぜひご覧いただきたい。本アトラスの造影所見は鳥肌が立つほどの画質である。国宝級の芸術といっても過言ではない。これは

どの美しいX線造影像を一同に見られることに喜びすら感じる。また, 本アトラスの造影所見から概観撮影としてのX線のすごさを改めて感じる。X線, 内視鏡検査のゴールは病理の肉眼像であるが, 本アトラスのX線像とマクロ像を対比していただきたい。本アトラスに掲載されているX線像が病理の肉眼像を凌駕していることがわかる。すなわち, われわれのゴールの域を超えて病変の微細所見が描出されているのである。今後も造影検査を行うときには目標とされるべき画像である。さらに, 画像のみならず, 総論および各論のそれぞれの初めの部分にコンパクトにエッセンスがまとめられているが, その一言一言には3先生, その他大勢の先人の消化器医の膨大な汗と努力の結晶がつづられている。

本書はまさに日本の消化管画像診断学の歴史そのものといっても過言ではなく, 白壁一門のX線診断学の正統的伝承者である細井董三先生, 馬場保昌先生, 杉野吉則先生の3先生の人生そのものの集大成である。内視鏡像から時代を感じる症例もあるが, それはまさに内視鏡写真

は機器の進歩に医師がようやくついていっており, 撮影された像はどうしても機械が撮影した感が否めまい。一方, X線は機械ではなく, いかにも人間(術者)が撮影した, という実感がわく検査であり, 美しい像が撮影できたときの喜び, 快感は内視鏡の比ではない。本書を通じて消化管診断におけるX線造影検査のすばらしさを再認識していただくと確信する。

本アトラスは拡大内視鏡/NBI診断, ESD治療をリードしている, 携わっている専門医, そしてこれから専門医を目指すすべての消化器医に見ていただきたい一冊である。本アトラスの総論を繰り返し熟読し, X線像を頭に焼き付けることで拡大内視鏡/NBI診断にもfeed backされ, いっそう診断能の向上と正しい診断に基づいた内視鏡治療成績の向上が期待される。そして, 序文でも述べられているように, 本アトラスが日本のすばらしい診断技術を後世にきっちり伝えるための一冊になることを期待する。

●A4 頁480 2011年 定価21,000円
(本体20,000円+税5%)

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)